

## 音楽リテラシー育成のための基礎的研究 (3)

—サイレント・シンギングに着目して—

三村 真弓 伊藤 真 大橋美代子 近藤 知美  
福田 秀範 向井さゆり 神野 正喜 松田 道枝  
川村 恭子

### 1. はじめに

音楽科授業における音楽活動を支えるものは、さまざまな音楽的能力である。この音楽的能力のうち、特に基礎となるものは音楽リテラシーである。音楽リテラシーとは、単に楽譜を読み書きできる能力を指すのではない。音楽リテラシーは、音高感・音程感・リズム感等の音楽的感觉、ならびに音楽の言語である音楽的語彙、さらに聴取力・弁別力・再生力などの能力が複雑にからみあって獲得されるものである。本研究者たちは、音楽リテラシー育成のためのカリキュラム開発の基礎的研究を行ってきた<sup>1)</sup>。

今年度は、視唱力に関わる重要な能力の1つである内的聴覚(内的聴感)に着目する。薬袋(1998)は、「内的聴覚とは、「バーチャル・サウンド(オーディエンス)」と考えられ、実際には、音が発されていなくとも頭の中であたかも音が実際に鳴っているように感じられる架空の聴覚である。そして、あたかも演奏しているのごとく、また、あたかも音楽を聴いているのごとくにイメージがなされ、行動化への原動力になりうる能力だと考えられる。」<sup>2)</sup>としている。楽譜上の音符の知識と内的聴覚が結び付けば、視唱力が獲得されることになる。つまり楽譜上の旋律を見て頭のなかでそれを音として構成し、さらに声で再現する行為が視唱なのである。小学校学習指導要領には、「ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌うこと。」<sup>3)</sup>と明記されているが、実際に小学校修了時にハ長調及びイ短調の視唱力が獲得されているかは疑問である。吉富・三村ら(2008)が中学1年生を対象に行った音楽学力調査では、階名視唱の得点は非常に低かった<sup>4)</sup>。したがって、小学校の児童を対象とした内的聴覚の調査では、視唱力に関わるものは困難である。そのほかに、内的聴覚を調査する方法として、「音と楽譜との照合」

が考えられる。小学6年生を対象として行われた昭和33年度全国学力調査(小学校音楽)では、「音と楽譜との照合」の課題を行っている。この問題は、ラジオで演奏された旋律と、印刷された楽譜とを照合させて、合っている楽譜を選ばせるものである<sup>5)</sup>。しかし、この課題には聴音力と読譜力が必要とされる。小学校高学年では可能かもしれないが、低学年や中学年では困難であろう。小学校児童の内的聴覚の発達を明らかにするためには、読譜力が関わらない調査方法が条件となる。そこで本研究者たちは、サイレント・シンギングに着目する。サイレント・シンギングとは、「声を出さずに心のなかで歌う」<sup>6)</sup>ことである。サイレント・シンギング=内的聴覚ではないが、サイレント・シンギングには内的聴覚が密接に関わっているのである。コダーイ・ゾルターンのコンセプトに基づいた音楽教育でも、内的聴覚育成のためにサイレント・シンギングを行っている<sup>7)</sup>。

本研究は、小学校の児童が、どの程度サイレント・シンギングの能力を有しているのかを明らかにすることを目的とする。  
(三村真弓)

### 2. 研究の方法

調査の目的は、児童が声を出さずに心のなかでどの程度正確に歌えるのかを明らかにすることである。調査は、2010年11月29日～12月20日にかけて行われた。調査対象としたのは、A小学校の児童(1年生37名、2年生38名、3年生40名、4年生38名、5年生39名、6年生38名)とB小学校の児童(1年生38名、2年生39名、3年生37名、4年生34名、5年生34名、6年生37名)の計449名である。

調査に用いた曲は、「かえるの合唱」(C-dur)であった。課題は、最初の4小節をラララで歌い、次の2小

節をサイレント・シンギングし、最後の2小節をラララで歌うという内容である(譜例参照)。調査開始前に、全員が音楽室で「かえるの合唱」を歌詞付きで1回、次にラララ唱で1回、サイレント・シンギング入りで2回練習した。調査は、個室で個別に行い、キーボードで最初の開始音C4を提示して、児童がアカペラで歌ったものをMDレコーダー(SONY MINIDISC RECORDER MZ-N920)に録音した。併せて、学校外での音楽の習い事経験などの有無を尋ねた。

### 【譜例】

前半部フレーズ                      中間部フレーズ

(声には出さず心のなかで歌う)                      後半部フレーズ

### 【評価方法】

MDレコーダーに録音した児童の歌声は、音楽科教員養成課程に在籍する学生7名(絶対音感保持者)によって評価された。評価内容は以下である。

#### ① 「前半部」「中間部」「後半部」の旋律線の正確さ

各部分の旋律を正確に歌っているかどうかを5段階で評価する。提示開始音はC4であるが、ハ長調で歌唱しているかどうかは問わない。評価基準は以下である。

- 5：正確な旋律線で歌っている
- 4：一部不正確な箇所はあるが、ほぼ正確な旋律線で歌っている
- 3：上行・下行は合っているが、全音・半音をあいまいに歌っている
- 2：不正確な箇所が多く、モノトーンに近い
- 1：モノトーンである

#### ② 「前半部開始音」「中間部開始音」「後半部開始音」の音程関係

児童が歌っている各フレーズの開始音高をドレミで記入する(近似音)。ピッチのずれが認められる場合は+もしくは-を付け加える(例：ド→「ド+」、高めのミ→「ミ+」、低めのミ→「ミ-」)。評価者が記入した開始音同士の音程関係(前半部開始音(ド)－中間部開始音(ミ)、中間部開始音(ミ)－後半部開始音(ド)、前半部開始音(ド)－後半部開始音(ド))を、

以下の基準にしたがって3段階で得点化した。

- 3：音高が一致している(例：ドード、ド<sup>-</sup>ード<sup>-</sup>)
- 2：音名が一致しているがピッチのずれが認められる(例：ドード<sup>+</sup>、ミ<sup>-</sup>ード<sup>-</sup>、ただしド<sup>+</sup>ード<sup>-</sup>は含めない)
- 1：音名が一致していない(例：ドーミ<sup>b</sup>)

(伊藤 真)

## 3. 分析と考察

### (1) 旋律線の正確さ

前半部フレーズ、中間部フレーズ、後半部フレーズのそれぞれの旋律線がどれくらい正確に歌われているのかを分析したものが、図1～図3である。

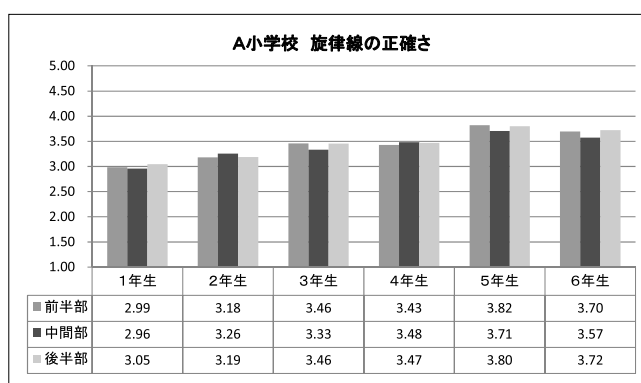


図1 A小学校 旋律線の正確さ

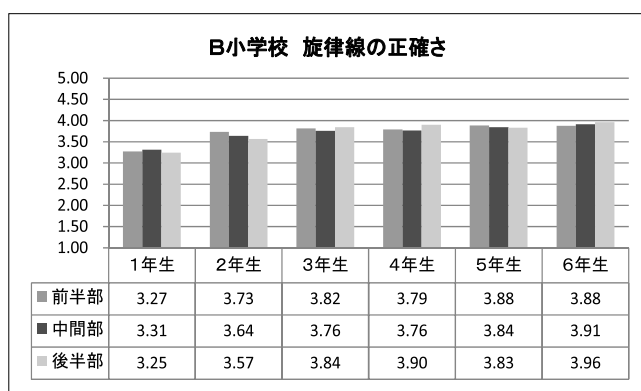


図2 B小学校 旋律線の正確さ

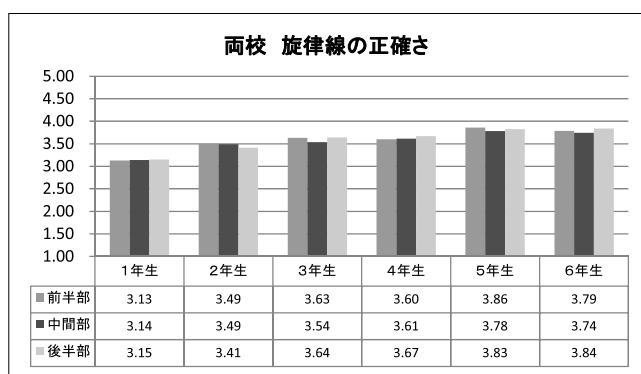


図3 両校 旋律線の正確さ

サイレント・シンギングの能力を見るには、サイレント・シンギング後の後半部フレーズの歌唱の正確さが問題となる。A小学校とB小学校では若干傾向が異なる。A小学校の後半部フレーズは、1年生から5年生まで着実に得点が上がリ、6年生で得点が若干下がっている。B小学校の後半部フレーズは、1年生から4年生まで得点が上がリ、5年生で得点が若干下がるが、6年生でまた得点が上がっている。A小学校の前半部・中間部・後半部フレーズの得点差には一定の傾向が見られないが、B小学校のそれにはある変化が見られる。1年生～2年生では、後半部フレーズの得点が最も低くなっているが、3年生で後半部フレーズの得点は急激に上昇して他の部分の得点を上回り、5年生で若干得点を下げるものの、6年生ではまた他の部分よりも得点が高くなっている。

両校合わせて平均化したものが図3である。前半部フレーズと中間部フレーズの得点が5年生まで上昇して6年生で若干下降するのに対し、後半部フレーズの得点は1年生から6年生まで着実に上昇し、6年生では他の部分の得点を上回っている。

次に、旋律線の正確さを、音楽の習い事経験の有無別に比較してみたものが図4～図6である。

A小学校、B小学校ともに、音楽の習い事経験有（以下、経験有群）>音楽の習い事経験無（以下、経験無群）となった。

A小学校では、経験有群は学年が上がるにつれて得点も上がっていき、5年生・6年生では4点前後の得点となっているが、経験無群は学年が上がっても得点が伸びていない。B小学校では、経験有群は2年生からほぼ4点前後の得点を上げているが、経験無群の得点はほぼ3.5点前後で一定しており、顕著な得点の伸びはみられない。

図7は、両校の後半部フレーズの旋律線の正確さを経験別に見たものである。経験有群と経験無群の得点差は4年生でいったん縮まるものの、5年生・6年生では広がっている。経験無群の得点が4年生から3.5点あたりで停滞しており、得点が伸びていないからである。

以上のことから、後半部フレーズの旋律線の正確さが学年をおって上がる傾向があるのは、経験有群の得点が上がっているからであることがわかった。

## (2) フレーズの開始音間の音程の正確さ

「前半部開始音ド」「中間部開始音ミ」「後半部開始音ド」のそれぞれの相対的な音程関係を表したものが、図8～図10である。フレーズの開始音の絶対音高の正確さはここでは問題にしない。

サイレント・シンギングの能力を見るのには、サイレント・シンギング前後のフレーズの開始音間の音程

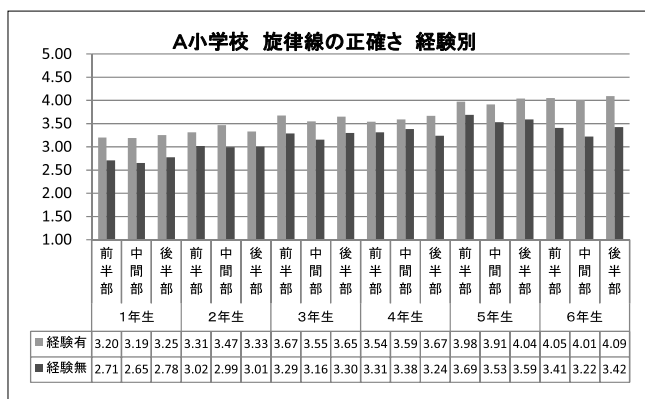


図4 A小学校 旋律線の正確さ 経験別

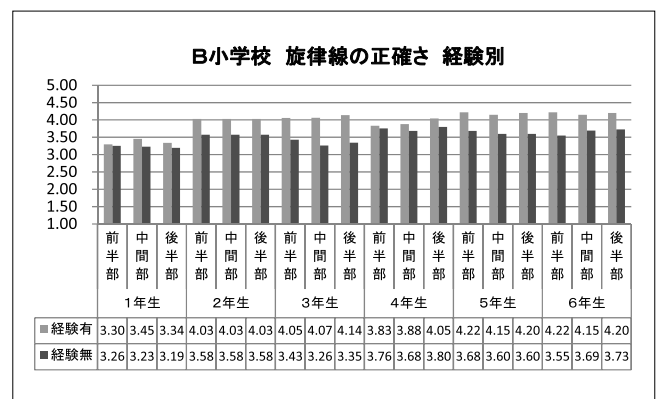


図5 B小学校 旋律線の正確さ 経験別

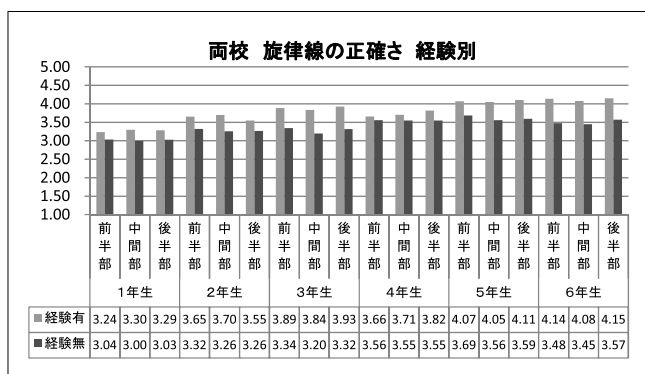


図6 両校 旋律線の正確さ 経験別

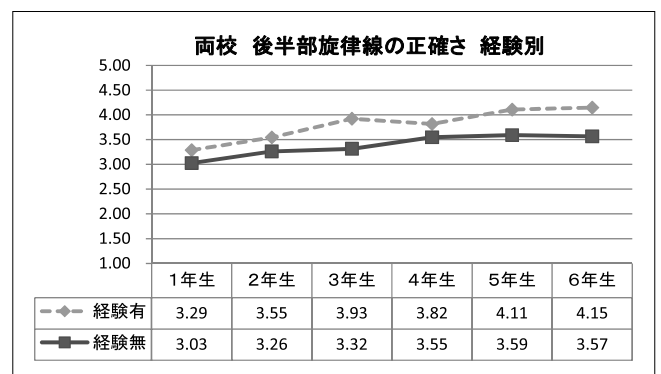


図7 両校 後半部旋律線の正確さ 経験別

関係(中間部の開始音と後半部の開始音との音程関係)が問題となる。すなわち、ミードの音程関係である。

A小学校では、ミードは、1年生と2年生では1.8点台と低いが、3年生で一気に得点が上がっている。4年生で得点が下降するが、5年生・6年生ではまた得点上昇している。B小学校では、ミードは、1年生から6年生まで得点が継続して上がっている。特に1年生から2年生にかけての得点の伸びが大きい。両校ともに共通する特徴は、前半部の開始音ドと後半部

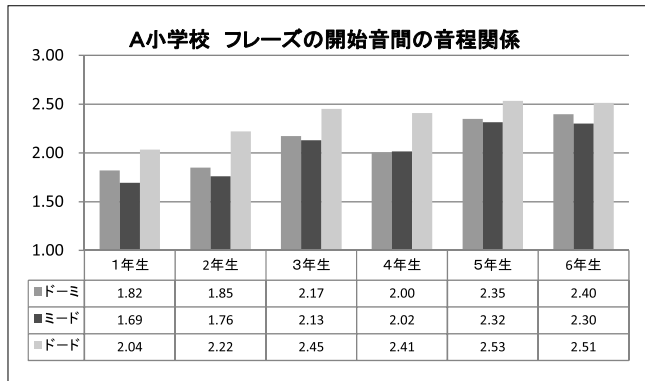


図8 A小学校 フレーズの開始音間の音程関係

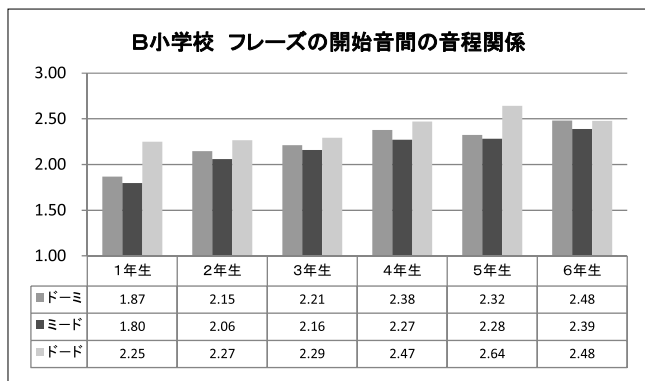


図9 B小学校 フレーズの開始音間の音程関係

の開始音ドの音程関係の得点が常に高いことである。調査の際に気付いたことだが、中間部のフレーズの開始音や旋律線がかなりはずれても、サイレント・シンギング後の後半部のフレーズの開始音でドに復帰する児童が何人か見られた。ド(C4)は、児童にとって特別な音高であることがわかる。

両校を合わせて平均したものが、図10である。ミードは、他の開始音間の音程よりも常に得点が高い。しかし、学年をおって着実に上昇し、最も得点の高いドードとの得点差が縮まっている。

次に、フレーズの開始音間の音程関係を音楽の習い事経験の有無別に比較したものが図11~図13である。

図11~図13から、総じて経験有群>経験無群となっていることがわかる。

図14~図16は、両小学校を平均して、各音程ごとに経験有群と経験無群を比較したものである。

ドーミとミードの音程関係では、経験有群>経験無群となっているが、ドードの音程関係では、1年生、2年生、4年生で両者の得点が逆転している。これに関しては原因不明である。

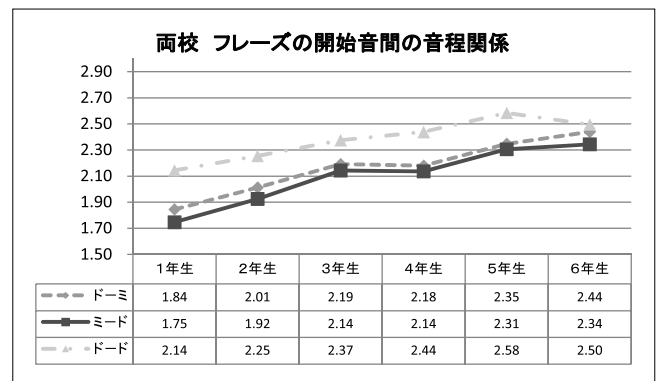


図10 両校 フレーズの開始音間の音程関係

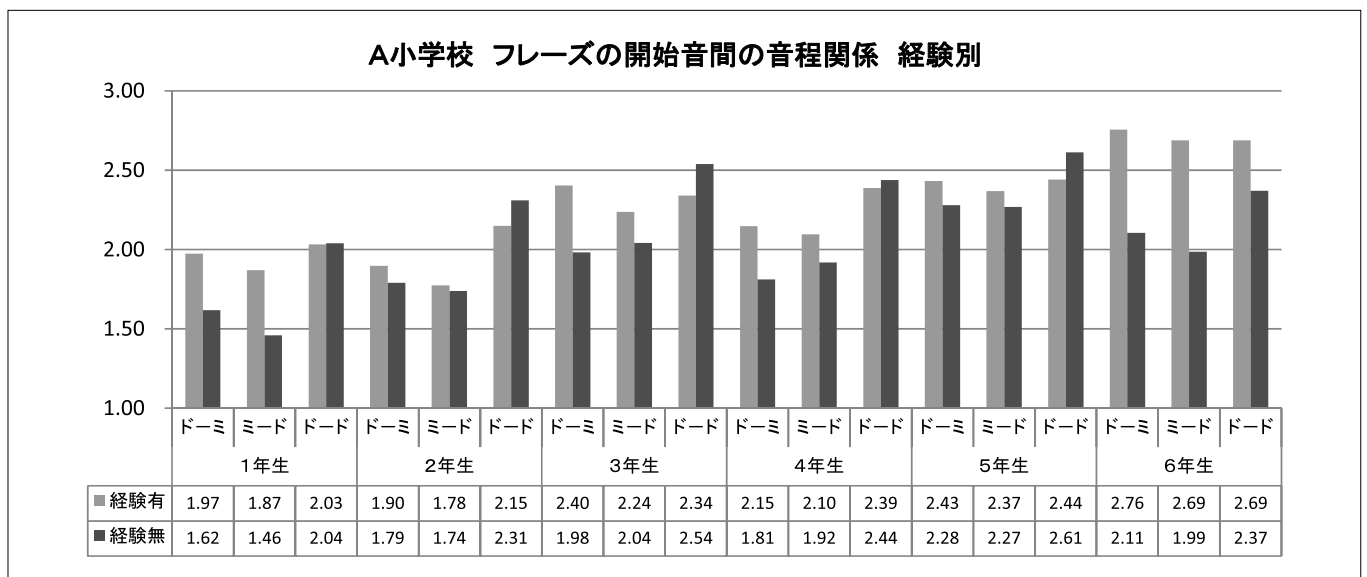


図11 A小学校 フレーズの開始音間の音程関係 経験別

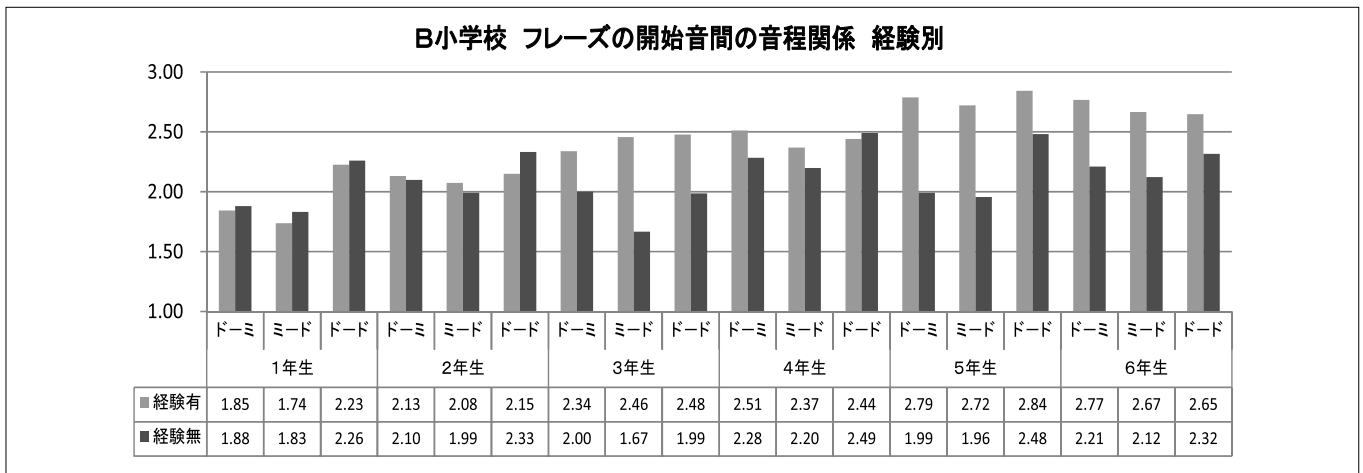


図12 B小学校 フレーズの開始音間の音程関係 経験別

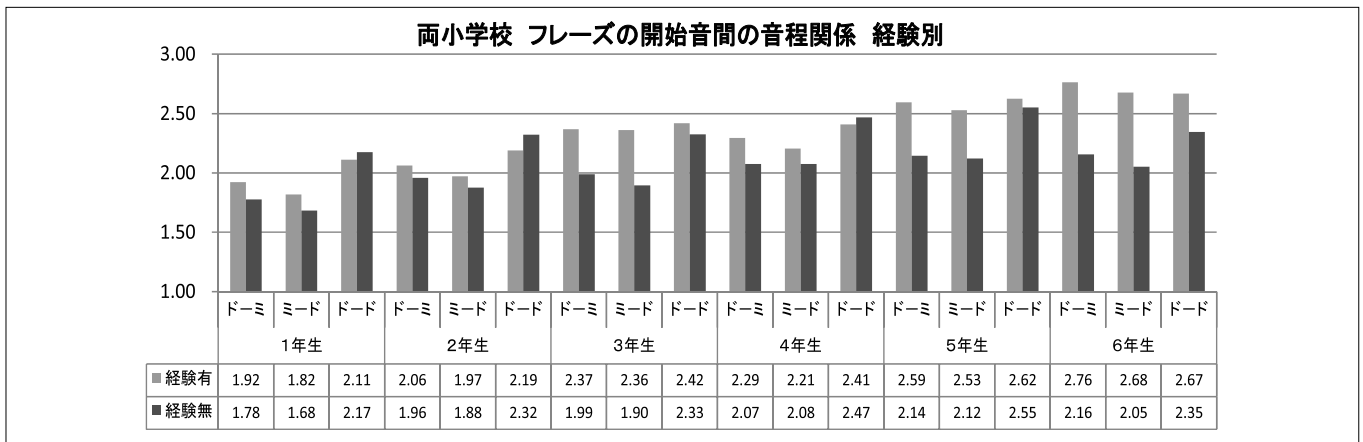


図13 両小学校 フレーズの開始音間の音程関係 経験別

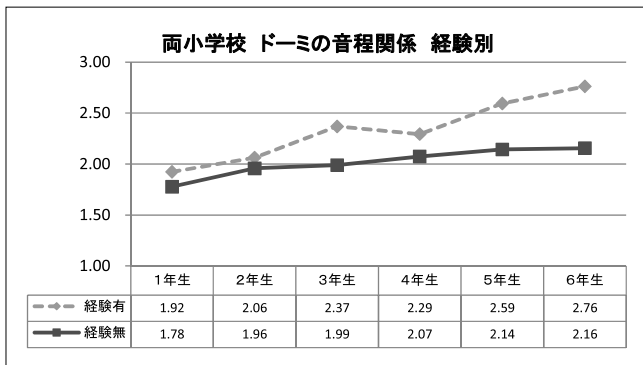


図14 両小学校 ドーミの音程関係 経験別

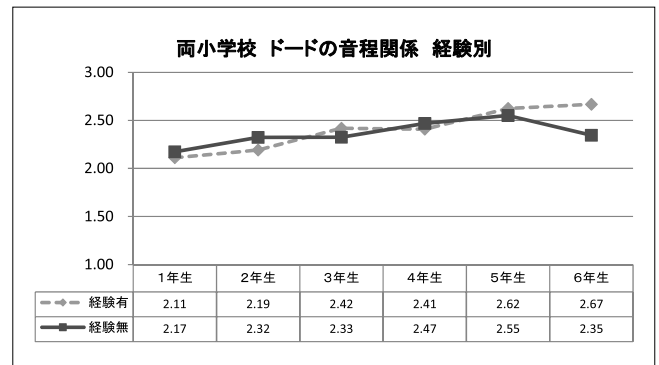


図16 両小学校 ドードの音程関係 経験別

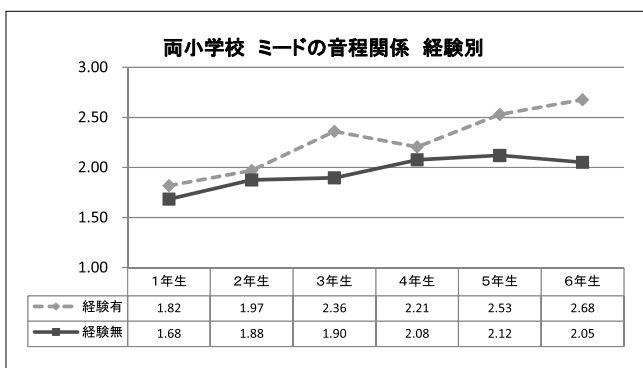


図15 両小学校 ミードの音程関係 経験別

経験有群が、どの音程関係においても学年をおって着実に得点を伸ばしているのに比べて、経験無群は、得点がほぼ横ばい状態で、伸びなやんでいることがよくわかる。  
(三村真弓)

#### 4. おわりに

以上のように、各フレーズごとの旋律線の歌唱の正確さや各フレーズの開始音間の音程関係は、学年が上がるとともに、ほぼ得点が高上がることがわかった。サイレント・シンギングに関してもそうである。しかし、

それは音楽の習い事経験有群の得点が伸びているのであって、経験無群の得点はそれほど伸びてはいなかった。特に、高学年では伸びなやんでいた。経験無群は、サイレント・シンギングだけでなく、歌唱力そのものもそれほど発達していない可能性があると考える。

(三村真弓, 伊藤 真)

#### 引用文献

- 1) 三村真弓, 河邊昭子, 徳永 崇, 青原栄子, 大橋美代子, 福田秀範, 中村将之, 宮崎将三「音楽リテラシー育成のための基礎的研究(1) —階名聴唱課題における階名の認知力と音高の再生力に着目して—」『学部・附属学校共同研究紀要』第37号, 広島大学学部・附属学校共同研究機構, 2009, pp.93-98。
- 2) 葉袋貴「内的聴覚とスキーマの形成について」兵庫教育大学大学院修士論文, 1998, p.17。
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領』東京書籍, 2008, p.79。平成10年度改訂小学校学習指導要領でも、ハ長調及びイ短調の視唱・視奏は、内容として明記されている。
- 4) 吉富功修, 三村真弓, 光田龍太郎, 藤井恵子, 桑田一也, 松前良昌, 増井知世子, 原 寛暁「中学校における音楽科の学力を確かなものとする教育プログラムの開発(1) —中学校入学時の音楽学力の実態を中心として—」『学部・附属学校共同研究紀要』第36号, 広島大学学部・附属学校共同研究機構, 2008, pp.155-163。
- 5) 文部省『昭和33年度 全国学力調査報告書』文部省調査局調査課, 1959, pp.75-76。
- 6) 八木正一「歌唱指導」『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004, p.235。
- 7) フォライ カタリン, セーニ エルジェーベト/羽仁協子, 谷本一之, 中川弘一郎共訳『コダーイ・システムとは何か—ハンガリー音楽教育の理論と実践—』全音楽譜出版社, 1974, pp.64-65。